

第18回島根乳腺疾患研究会

日 時：平成23年3月12日 (土) 15:00~18:00

会 場：浜田医療センター 2階 総合研修センター
浜田市浅井町777-12

Tel: 0855-25-0505 Fax: 0855-28-7070

当 番 世話人：栗栖 泰郎 (浜田医療センター外科)

1. 島根県の巡回検診の状況

島根県環境保健公社健診課

児玉亜紀子, 中島 香, 渡部 充
栗原 康平

同 総合健診センター

吉川 和明

島根県環境保健公社 (以下、公社) における巡回検診の状況を報告するとともに、読影体制とその成績について紹介する。県下の集団検診の多くはマンモグラフィ単独検診となっていて、公社の一台の巡回検診車=なでしこ号で行われている。しかし平成20年度の島根県のデータでは、個別検診を含めた全受診者数の21%を占めるに過ぎなかった。

導入後3年半の成績は、のべ受診者数17,498名 (西部10,765名, 東部6,733名), 要精検率7.6%, 精検受診率83.2%, 発見乳癌数52名, 癌発見率0.30, 陽性反応的中度3.89であった。西部では読影医不足から愛知乳癌検診研究会に協力を要請したところ、三重読影を行う体制が実現し、これにより要精検率は5.6%, 陽性反応的中度は5.21と、従来の二重読影を凌駕する結果が得られた。来年度からは島根県のバックアップもあり新たにもう一台の巡回車を導入するため、受診率の向上に貢献できるものと考えている。

2. 当院におけるCTリンパ管造影を併用したセンチネルリンパ節生検の現況

独立行政法人国立病院機構浜田医療センター外科

高橋 節, 山本 学, 永井 聡
栗栖 泰郎, 岩永 幸夫

同 病理

長崎 真琴

乳癌患者に対しての腋窩リンパ節郭清の省略の適応を検討するため、2007年1月~2009年7月までに当院でback up 郭清を行うセンチネルリンパ節生検 (以下

SLNB) を色素法のみで行った32例を検討した。その結果、腋窩リンパ節郭清の省略の適応を術前にN0と診断した症例でかつT0, T1, 並びに腫瘍径3cm以下、さらに患者様が希望し、承諾を得られた症例とした。平成21年7月からSLNB陰性例には腋窩リンパ節郭清を始めた。また術前CTリンパ管造影も導入した。その結果、平成21年7月以降のSLN同定率: 93.5% (31例中29例), SLN郭清個数: 平均2個 (1~6), SLN偽陰性率: 0% (29例中), SLN転移陽性: 2例 (6.9%) であった。当院におけるCTリンパ管造影を併用したSLNB (色素法) の現状を検討し、若干の文献的考察を加えて報告した。

3. OSNA法によるセンチネルリンパ節転移同定が不能であったCK-19陰性乳癌の1例

島根大学医学部卒後臨床研修センター

福垣 篤, 和氣 仁美

島根大学医学部消化器総合外科

稲尾 瞳子, 百留 美樹, 山口 恵実

三成 善光, 板倉 正幸, 田中 恒夫

島根大学附属病院病理部

丸山理留敬

要旨: 当院では平成21年よりセンチネルリンパ節の術中迅速診断にOSNA法を併用しており、現在までに約70症例ほどに適用したが、今回、稀なCK-19陰性乳癌の1例を経験したので報告する。症例は66歳女性、右乳癌に対して胸筋温存右乳房切除術を施行した。術中迅速診断では鏡検およびOSNA法において陰性であったが、永久病理標本にてmicrometastasisと診断された。リンパ節転移巢のCK-19免疫染色を行ったところ陰性であったため、原発巣も同様にCK-19で染色するところからも陰性であった。CK-19陰性乳癌の頻度は3~7%程度という報告があり、無発現例と低発現例の2つのタイプが存在する。CK-19陰性の明確な原因は不明だが

遺伝子変異の可能性が指摘されている。当院ではOSNA法と鏡検を併用しているが、本症例のような偽陰性も存在することを考慮する必要がある。

4. 乳癌を疑った非癌病変の画像診断の再検討

独立行政法人国立病院機構浜田医療センター外科
吉川 和明, 栗栖 泰郎, 高橋 節
永井 聡, 山本 学, 岩永 幸夫
同 病理
石田 克成, 長崎 真琴

【目的】浜田医療センターでの乳腺外来の成績を報告するとともに、画像診断(マンモグラフィ、超音波、MRI)で鑑別疾患の第一に乳癌を挙げ(カテゴリー4)、病理学的に非癌と診断された疾患の所見をレビューし報告する。

【対象】2009年11月から2010年12月までの乳腺外来での画像診断実施件数は611例、発見乳癌は41例で早期癌22例(55%、非浸潤癌9例、I期癌13例)を含む。全検査中カテゴリー4と考えたものは30例あり、うち非癌病変17例の病理像との異同を検討した。

【結果と結語】内訳は乳管内乳頭腫5例、腺症4例、異型乳管過形成、線維腺腫、線維症、肉芽腫性乳腺炎各2例。多くは超音波が最終判定となるが、他のモダリティに引っ張られて悪性寄りに考える傾向にあった。また非癌病変のバリエーションを悪性寄りに診断していた。癌とともにmalignant potentialを有する非癌病変が鑑別に挙がる時は、生検と厳重な経過観察を促す意味でもカテゴリー4で指摘することは適切と考えられた。

5. リンパマッサージ指導の経過と現状報告

浜田医療センターリハビリテーション科
作業療法士
森山香奈子, 黒川めぐみ, 藤原 明子
堀内 京子
外科系診療部長
栗栖 泰朗

当院では乳がんの患者様に対し、昨年1年間(1月～12月)に38例の手術が施行された。その内、24例の方に乳ガン術後のリハビリ(関節可動域訓練・日常生活動作訓練・リンパマッサージ指導)を実施した。このリンパマッサージ指導は、約3年前よりDr.から早期の浮腫予防を目的に依頼があり、入院患者様へ指導を行っていた。しかし、退院後のリンパマッサージのセルフケアが不十分であることが分かった。そこで、昨年5月から退院後の患者様および外来患者様に対してもマッサー

ジ指導を行うことにした。この度、指導の必要性および効果を把握する目的で、リンパマッサージ指導を行なった患者様に対し、評価・アンケートを実施した。その結果と改善点などを報告する。

6. 乳がん患者の化学療法中の食事へのアプローチ

松江赤十字病院栄養課
安原みずほ, 長谷 教代, 太田 尚志
引野 義之
同 8階東病棟
足立 えみ, 篠田 里絵, 金津 悦子
林 美幸, 月坂美智代
同 乳腺外科
曳野 肇, 小池 誠, 村田 陽子

【要旨】乳がん患者への適切な食事提供と、在宅での食事の工夫についての情報提供を目的に、化学療法経験者にアンケート調査を行った。化学療法中の体調変化は食欲不振が最も多く、味覚の変化、吐き気やおう吐であった。食べやすいものは、あっさりしたもの、冷たいもので、果物やアイスクリーム、めん類などが好まれた。食べにくいものはこってりしたもの、肉類、油を使用した料理だった。食欲不振時も自分で調理しているものが多く、水分だけでもとるようにしていた。管理栄養士の関わりは23.9%と少なめだったが、食事変更後は全ての者が食べやすくなったと回答していた。食べやすい食品には個人差があるが、スープや冷たいものを好む場合は多く、フルーツジュースやスープの提供が出来ると思われれる。入院中に出来ることは限られているが、日常の食事の工夫についての情報提供や体調不良時のレシピの提案などをし、より良い療養生活が出来るようサポートしたい。

7. 乳がん化学療法における口内炎に対するレバミピドの予防効果

島根県立中央病院薬剤科
原 弓美, 園山 智宏, 後藤 澄子
島根大学医学部附属病院薬剤部
福間 宏, 上村 智哉, 西村 信弘
直良 浩司
島根県立中央病院乳腺科
青木 恵子, 高村 通生, 武田 啓志
橋本 幸直
島根大学医学部附属病院乳腺内分泌外科
板倉 正幸

【目的】胃炎・胃潰瘍治療薬レバミピドはフリーラジカ

ル消去・産生抑制作用, 唾液分泌促進作用を有し, 口内炎の予防, 治療に有効と報告があるが十分なエビデンスはない。そこで乳がん化学療法における口内炎に対するレバミピドの予防効果を検討した。

【方法】EC, FEC療法を行う文書で同意が得られた患者を対象とし, 無作為にA群(レバミピド非投与), B群(レバミピド内服), C群(レバミピド含嗽), D群(レバミピド内服および含嗽)に割付けた。口内炎の判定は他覚的評価と質問票での自覚的評価とした。

【結果・考察】2009年11月時点で24名(A群6例, B群7例, C群5例, D群6例)が参加した。割付け前(レバミピド投与前)にすでにEC, FEC療法を1コース以上行い, 口内炎が発現した4症例について, レバミピド投与後の評価を行った結果, いずれの症例(B群あるいはC群)も口内炎の発現はほぼ消失した。このことから口内炎に対してレバミピドが予防効果を有する可能性が推察された。

8. ラパチニブを用いた乳癌治療における薬剤師のチーム医療への関与

島根大学医学部附属病院薬剤部

原 ゆかり, 福間 宏, 西村 信弘
直良 浩司

同 乳腺内分泌外科

百留 美樹, 稲尾 瞳子, 三成 善光
板倉 正幸

【目的】乳癌化学療法において, ラパチニブとカペシタビンの併用療法が用いられるが, 重大な副作用が報告されている。今回, 本療法を施行された患者に, 外来受診時に薬剤師が副作用モニタリングをおこない, さらに薬薬連携によりチーム医療に貢献できた症例について報告する。

【方法】本療法適応患者について, 薬剤師が副作用等をモニタリングし, 結果を電子カルテへ表示し主治医等との情報の共有化を図った。また, 検査値等の情報をお薬手帳への記載にて調剤薬局に提供した。調剤薬局からの情報提供にもお薬手帳を利用した。

【結果・考察】薬剤管理指導中の患者において, 骨髄抑制, 爪周囲炎, 手足症候群の副作用が出現したが, モニタリングデータの共有化による早期対応が重篤化を回避できた。また, 休薬期間等の服用方法について病院薬剤部および調剤薬局で指導を強化することにより, 服薬遵守の向上が図れ, 継続した薬物治療をサポートすることができた。

9. 地域連携医療からの学び ～転院先で終末期を迎えた乳癌患者のケースを通して～

松江赤十字病院消化器・乳腺外科病棟

篠田 里絵, 足立 えみ, 金津 悦子
林 美幸, 月坂美智代

同 地域連携室

柿本可奈恵, 脇田 和子

同 乳腺外科

小池 誠, 曳野 肇, 村田 陽子

癌終末期の患者の在宅診療を実現するためには中核病院と地域医療機関との密接な連携が必須である。今回当院と地域の医療施設が連携し, 76歳乳癌終末期患者の在宅生活を支援した。

患者は長い闘病生活を経て在宅への希望とともに転院先での信頼関係を築くことへの不安など複雑な思いを持っていた。そこで, 書類のみで紹介するのではなく, 転院先と合同カンファレンスを行った。結果, 転院先との患者理解が深まり, 患者の安心感も大きく, 患者を継続的に医療支援することに繋がった。今回のケースをもとに今後の理想的な地域連携の在り方について検討していきたい。

【特別講演】

「地域特性を生かした乳癌の診療連携

ー当科における連携パスのコンセプトー

大阪市立総合医療センター乳腺外科

小川 佳成 先生

当院では, かかりつけ医機能を主体とした乳がん術後連携パスをH20年5月に導入した。大阪府統一パス作成のために一部改変し, これまでに183施設と324名の患者の連携診療を行っている。連携は地域特性を考慮すべきで, 大阪府下でも3種類の運用形態がある。バリエーションの設定は種々あろうが, 最終的な目的は患者を路頭に迷わせないことである。スムーズな運用のためにコーディネーターの存在は不可欠であり, 院内各所の協力と宣伝も重要である。情報共有手段である連携手帳を活用すれば, 連携医のみならず, 地域でチームとなり患者を支えることも期待できる。互いに力を出し補い合う診療連携は, 患者にも医療者にも助かる制度と思われる。

連携パスは単なる道具, でも, あれば便利です。

* * * * *

厳しい医療環境の下で奮闘されている皆さんの努力と熱意に心から敬意を表します。我々に協力できることが有れば, いつでも遠慮なくどうぞ。